

令和6年度 「ハッピー♥スマイル」 第4回開催報告

1 開 会

【日 時】 令和6年11月17日(日) 13:00～

【場 所】 浅口市健康福祉センター

ボランティア研修室

【参加者】 保護者2名 救急救命士1名 医師1名
養護教諭1名



2 アレルギー情報提供

日経メディカル令和6年10月2日

「エピペンじゃなく、「ゾレア」と「Neffy」を使いたい」

谷口恭の「都市型総合診療の極意」より

アナフィラキシー（ショック）を起こした場合、エピペンは非常にありがたい「味方」ではあるが、いつも助けてくれるわけではない。海外メディアから4つの症例を提示する。

症例1：42歳米国人女性医師、症例2：15歳英国人女子、症例3：13歳英国人女子

症例4：20歳カナダ人女性

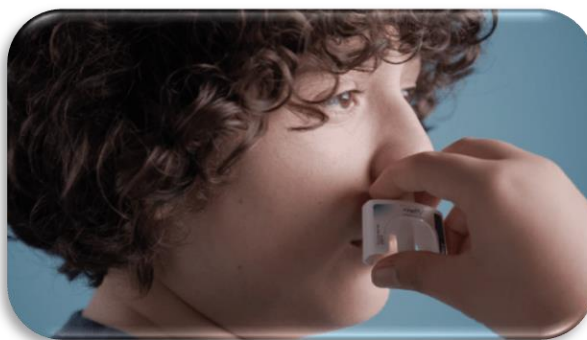
これらの事例から浮かび上がる注目すべきポイントは「エピペンが使用されていたにもかかわらず助からなかった」点だ。報道を振り返ると、症例2はエピペンが2本使われている。症例1の被害者は医師であることから、エピペンは適切に使用されたことが予想される。つまり、最後のとりでであるエピペンは常に頼りになるとは限らない。

なぜだろうか。僕は2つの理由を考えている。1つは「アドレナリンの量」だ。エピペンは1本あたりのアドレナリンが0.3mgしか含まれていない。体重にもよるが、これでは効果が不十分だろう。

通常、救急の現場ではアナフィラキシーの症例に対し、アドレナリンを0.5mg、場合によっては1mgを使用することもある。日本アレルギー学会が2022年に公表した「アナフィラキシーガイドライン2022」にも、アドレナリンの使用量は成人なら0.5mgが望ましいと記載されている。

もう1つは「針の長さ」だ。日本で発売されているエピペンの針の長さは1.5cmしかなく（症例2の記事では1.6cmとされている）、体格にもよるが、これでは筋層まで届かない。皮下脂肪にアドレナリンが注入されれば、作用するまでに相当のタイムラグが発生することは想像に難くない。ならば、体格にもよるがエピペンは3本携帯する必要があるのではないだろうか。だが、3本あれば安心できるのだろうか。そもそもエピペンの注射は本人であろうが家族であろうが、かなりの勇気が求められる。小学校の教師が適切なタイミングで生徒に接種できなかったという話をしばしば聞くし、米国にもエピペンを使用しなければならない状態で躊躇して自己注射できなかった割合は52%にも上るといふ報告がある。

そこで期待されるのがエピネフリン点鼻薬「Neffy」だ。今年8月9日、米食品医薬品局（FDA）は、体重30kg以上の成人および小児のアナフィラキシーの治療薬としてNeffyを承認した。10月初旬までに発売される予定で、効果はエピペンと同等であるとされている。日本でも早急に導入すべきだろう。Neffyの使用へのハードルがエピペンとは比較にならないくらい低いのは自明だ。



開催報告を作成しているときに以下の記事が出ました。

○経鼻投与のアナフィラキシー補助治療薬候補を承認申請（アルフレッサ ファーマ）

アルフレッサ ファーマは 11 月 29 日、経鼻投与のアナフィラキシー補助治療薬候補・アドレナリン（一般名）点鼻液の製造販売承認申請を行ったと発表した。蜂毒、食物、薬物等に起因するアナフィラキシーに対する補助治療薬として申請した。アナフィラキシーに対しては注射製剤が広く使用されているが、同社は経鼻投与を可能とすることで、迅速な対応とともに、患者や患者家族の負担軽減へ貢献することに期待を寄せる。承認されれば、国内初の経鼻投与のアナフィラキシー補助治療薬となる。

3 情報交換

今回は参加者も少なく、アレルギーの情報交換は特にありませんでした。今年も正月の能登地震に始まり、各地で豪雨などによる災害が多発しました。救急救命士と養護教諭（平成 30 年の西日本豪雨災害時に被災した小学校勤務）のメンバーから災害時の対応についていろいろとお話をいただきました。異常気象が普通となり豪雨災害、地震の頻発など日常的に災害と隣り合わせの日々です。特に岡山県は災害の少ない県であり災害時の対応に危機感が少ないようです。常日頃から、いざという時のために備えを怠らないようにしなくてはなりません。



次回は、**1月19日（日）浅口市健康福祉センター**で、情報交換や来年度の活動計画について考えたいと思います。多数のご参加お待ちしております。

（浅口医師会 高山 晴彦）